

氏名（本籍）	ヨシダカスミ 吉田香澄（静岡県）
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第144号
学位授与年月日	平成17年3月25日
学位論文等題目	論文 中世後期トスカーナの宗教建築におけるポリクロミアに関する研究
論文等審査委員	
（主査）	東京芸術大学 助教授（美術学部） 野口昌夫
（副査）	” 教授（ ” ） 益子義弘
（ ” ）	” ” （ ” ） 片山和俊
（ ” ）	” ” （ ” ） 黒川哲郎
（ ” ）	” 助教授（ ” ） 光井 渉
（ ” ）	法政大学 教授（工学部） 陣内秀信

（論文内容の要旨）

本論文は中世後期のトスカーナにおいて宗教建築の外壁に施されたポリクロミアの形態に関する論考をまとめたものである。一般に「ポリクロミア policromia(多彩装飾)」とは色が相互に区分され、二色以上の色彩が反復する装飾法を示す。本研究では、構造の一部でありながら装飾としての役割を持つ「建築的」ポリクロミアというものを新たに定義し、これを対象とする「ポリクロミア」とした。

西洋建築史においては、材料の観点から意匠との関係を明らかにした研究は極めて少なく、そのような観点より論じられることは、無意味なこととすらされていた。そこで、ポリクロミアという独自の意匠そのものに着目し、材料の持つ色彩と形態の関連性とそれに基づく立面の意匠を解明することは、今後の西洋建築史研究において新たな方向性を示すことが可能となる。よって本研究では、本来建築史研究に求められた通時的な概念に沿った視点から研究を行うのではなく、地域と時代を限定し、現存する事例の実体を扱うことで、現象化したポリクロミアの形態の解明を試みる。そこで、本研究が対象とする「中世後期」は概ね1000年から1400年の期間であり、さらに「宗教建築」とはキリスト教の礼拝を行う場として使用されていた建物を示す。対象とした地域は、ポリクロミアが施された事例数がイタリア国内で最も多く、不変の色彩が中世後期から現代まで顕著に体现されているトスカーナとする。

このように本論文では、中世後期トスカーナの宗教建築を対象にし、視覚効果を利用したポリクロミアの形態分析を通して、使用された材料と意匠の関係、ならびにポリクロミアが施された建築の立面の意匠における材料の役割を明らかにすることを目的とする。

第1章「序論」では、研究の背景と意義、研究の目的、研究の構成について述べ、本研究の位

置づけを明確にしている。

第2章「トスカーナのポリクロミアにおける石材所在地の分布と使用の様態」では、ポリクロミアを形成する色彩と材料は、明暗対比が反映しやすい組み合わせになっており、さらに、その二色は異なる種類の材料によって形成されている。また、石材所在地の分布状況と材料の使用頻度から、セルペンティーノ/serpentino(蛇紋岩)の例外を除き、基本的にはポリクロミア事例の近郊に所在する材料が使用されている。このように、石材所在地の分布状況と材料の使用頻度の関係、ならびに、ポリクロミアを形成する材料の使用の様態を明らかにした。

第3章「トスカーナのポリクロミアの類型化」では、次の二つの方法によって類型化することにより、トスカーナのポリクロミアの形態を体系的に捉えてその全体像を明らかにした。第一の類型化では、立面構成の客観的、かつ系統的な類型化によりポリクロミアの形態の実相を明らかにし、第二の類型化は、第一の類型化を基底として色彩、材料、形態の三指標による類型化を行い、トスカーナのポリクロミアの地域ごとの傾向を明らかにした。さらに、これらの類型化を踏まえてポリクロミアの形態と聖堂の階層序列の関係を考察した結果、聖堂の種類よりも地域性との間に密接な関係がみられた。

第4章「異種の石材による濃強縞模様型ポリクロミア」では、第3章で行われた類型化から、異種の石材による濃強縞模様型であるピストイアのポリクロミアに焦点を当て、明暗対比が強調された場合のポリクロミアの様相を明らかにした。ピストイアでは、明暗対比を強調した縞模様と幾何学模様が濃密かつ均質に施され、トスカーナの中で傑出したポリクロミアの様相であるといえる。ピストイアのように、明暗対比を強調する石材の使用が可能な場合、ポリクロミアの形態は可能な限り濃密化することを明らかにした。

第5章「煉瓦と石材による濃強縞模様型ポリクロミア」では、第3章で行われた類型化から、ヴォルテッラ、シエナ周辺都市にみられる煉瓦と石材による濃強縞模様型に焦点を当て、ポリクロミアを構成する色彩は存在するが、石材が不足する場合のポリクロミアの様相を明らかにした。さらに、異種の石材によるポリクロミア、他の地域の煉瓦を使用したポリクロミアの形態との比較より、トスカーナにおいて煉瓦は暗色を担う石材の代用であったとは必ずしもいえず、トスカーナにおける煉瓦使用が、運搬の必要がないために経済的に安価であるという利点に加え、田舎の小規模聖堂においてなるべく広い面積のポリクロミアを施す解決策であることを示した。

第6章「サルデーニャのポリクロミアとトスカーナのポリクロミア」では、まず、ポリクロミアを構成する石材は存在するが、明暗対比を強調しない場合のポリクロミアの様相を明らかにし、トスカーナから伝播したと考えられるサルデーニャのポリクロミアとトスカーナのポリクロミアとの比較を行うことによって、トスカーナのポリクロミアの独自性を明らかにした。トスカーナにおける混成縞模様型、淡弱縞模様型ポリクロミアは、縞模様の構成を変える、もしくは均衡を崩すことで縞模様を強調することが可能となっている。一方、石材に関して、トスカーナのような良質のものが不足しているサルデーニャのポリクロミアは、トスカーナに比べると、立面の意匠において洗練されておらず、異なる色を交互に積むという単調な装飾である。このように、明暗対比の強調を重視しない両地域におけるポリクロミアの異なる表現により、立面の意匠を工夫することで、強い明暗対比に比肩しうるポリクロミアを形成することは可能であることを明らかにした。

第7章「結論」では、各章で得られた結果をまとめ、本研究で得られた知見を総括している。